

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730604

研究課題名(和文)小中学生の制裁的いじめ加担における恨み感情とシャーデンフロイデの役割

研究課題名(英文)The role of resentment and schadenfreude in participation of bullying as a sanction among elementary and junior high school students.

研究代表者

沢田 匡人(Sawada, Masato)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：40383450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、他者に対して怒り続ける「恨み」、他者の幸福に苛立ちを禁じえない「妬み」、他者の不幸を喜ぶ「シャーデンフロイデ」などの一連の感情がいじめ加担に果たす役割を明らかにし、いじめ予防につながる成果を提供することにあった。

小中学生を対象とした調査では、「いじめ」という文言を直接用いることなく、過去にいじめに加担したかを測定する項目を用いて精度の高いデータ収集に努めた。仮想場面を用いた調査では、制裁的な理由によるいじめに誘われた際に、いじめの被害者をあらかじめ恨んでいた場合には加害者を支援する側にまわりやすいのに対し、被害者を妬んでいた場合には傍観者になりやすいことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the role of negative emotions in participation of bullying to gain useful insight into prevention of bullying. The negative emotions included "resentment", the continuous anger against others; "envy", feeling of resentful longing; and "schadenfreude", pleasure derived by another person's misfortune.

The study for elementary and junior high school students was conducted to measure their experiences of reinforcing the bullying without using the word "bullying" to gather data with high reliability and validity. By using hypothetical scenario, it was found that when children were asked to join in bullying as sanction and if they had a feeling of resentment towards a victim prior to bullying, they tended to become supporters of the perpetrators. However, if they had a feeling of envy towards a victim, they tended to become passive observers.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：いじめ 恨み感情 シャーデンフロイデ 妬み 加担経験 復讐心 制裁

1. 研究開始当初の背景

わが国において、子どものいじめ問題が取り沙汰されて久しい。しかし、いじめがなぜ生じたり維持されたりするのかに関しては未だに不明な点が多く、研究成果の蓄積が待たれている。

学級集団で発生するいじめについて、その加害者や被害者の特徴に関心が寄せられることが少なくない。しかし、いじめが継続されたり助長されたりするメカニズムに注目するならば、いじめの四層構造(森田・清永, 1994)で言うところの、「観衆」の役割も決して無視できない。なぜなら、いじめの被害者に同情的な者がいる一方で、「人の不幸は蜜の味」とばかりにいじめを喜び、いじめを助長する者がいる可能性も想定できるからである。このように不幸に見舞われた他者に対する喜びの感情は、ドイツ語で「シャーデンフロイデ (*schadenfreude*)」と呼ばれる。

いじめに観衆として参加する経験、すなわち「いじめ加担経験」とシャーデンフロイデの関係について、沢田(2009)は、小中学生のシャーデンフロイデには、いじめ加担経験を促進する効果があることを報告している。しかし、この研究では、あくまでいじめとは無関係の他者の不幸を喜びやすい者は、いじめ加担経験が多い傾向にあることが示唆されたに過ぎず、いじめの維持や助長に関わるプロセスの解明には至っていない。いじめの直接的な参加に関わる感情のメカニズムを明らかにできれば、いじめに加担する行為の抑止や、いじめ収束を早めるための効果的な介入の布石となることが期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、恨みとシャーデンフロイデのようなネガティブな感情がいじめ加担に及ぼす役割を明らかにし、いじめの予防や改善につながる研究成果を提供することにあった。

現代のいじめでは、本来ならプラスに価値付けられて排斥の対象とならなかった要素を持つ子どもでさえ、いじめの対象に選ばれてしまうことも少なくないという(森田・清永, 1994)。また、不平等が不正でしかないという意識、すなわち「妬み」が、恵まれた他者への非難や弾劾に繋がるとの指摘もある(土居, 1998)。さらに、妬みを引き起こしやすいパーソナリティとしての復讐心、すなわち「恨み感情」の抱きやすさの存在を指摘する向きもある(沢田・葉山, 2009)。

本研究では、特定の他者の不幸を企図する「恨み感情」と、特定もしくは不特定の他者の不幸を喜ぶ「シャーデンフロイデ」に焦点を当て、これらの感情といじめ加担との関連を検討した。

3. 研究の方法

恨み感情やシャーデンフロイデなど、社会的に認されにくい感情を実際に喚起させることは倫理的に問題がある。そこで本研究では、質問紙による調査を積極的に活用した。仮想場面を用いた自己報告型の質問紙は、回答者の心理的な負担や、倫理的問題も少ない。また、回答者の負担を軽減すると同時に、使用する項目数や構成にも細心の注意を払い、回答のしやすさを考慮した質問紙を作成して調査に臨んだ(図1)。

さらに、いじめ加担経験の測定に際しては、回答者に対して「いじめ」という文言を直接用いることなく、いじめを結果的に補助するような行動の有無に対する回答を求めることによって、精度の高いデータ収集に努めた。

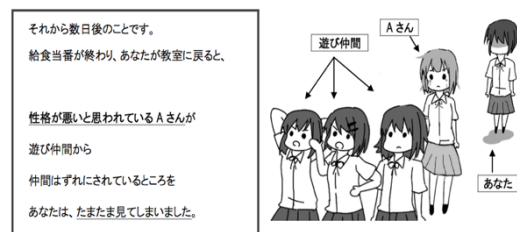


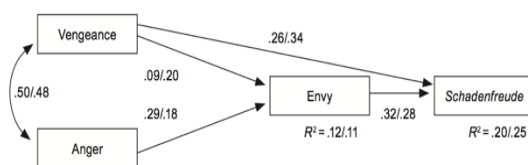
図1 いじめ目撃時の感情の測定に用いられた場面例

4. 研究成果

(1) 恨み感情とシャーデンフロイデの関係

大学生523名を対象とした質問紙調査において、パーソナリティとしての恨み感情の抱きやすさ(以下、「復讐心」と、仮想的な場面における感情への回答を求めた。仮想場面は、妬みとシャーデンフロイデを喚起させるような内容で、架空の大学生に対する感情の評定を求めるものであった。男女の違いを考慮した解析を通じて、男女問わず復讐心がシャーデンフロイデの喚起を促進することや、復讐心が妬みを媒介してシャーデンフロイデに至るプロセスは、女性のみには見られないことが明らかになった(図2)。

こうした結果から、復讐心が高い人は、実際に恨みを晴らすような行動をとらなくとも、当該の復讐心とは無関係な他者の不幸を喜ぶことによって溜飲を下げている可能性が示唆された。



注) 左は男性、右は女性の値を示す。

図2 復讐心と特性怒りから妬みを介してシャーデンフロイデに至る因果モデル(Sawada & Hayama, 2012)

(2) いじめ加担経験の実態と変化

いじめ加担経験については、県内の小中学生約 13000 名を対象に、約 6 ヶ月の期間を置いた 2 波パネル調査を実施した。いじめ加担経験は 10 項目から構成されており、「いじめ」という言葉を用いず、いじめに加担した経験を問う形式であった。

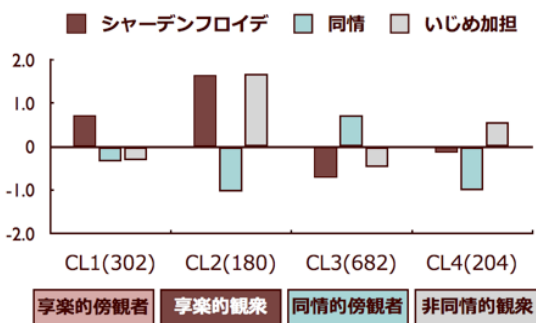
いじめ加担経験の項目を、分析結果と項目の内容に基づいて「能動的」と「受動的」とに分け、それぞれの得点について 6 ヶ月間の変化を検討したところ、いずれのタイプの加担が多かった児童生徒は、半年後の加担も多い傾向にあることが明らかになった。また、地域や学校種の違いにより、いじめ加担経験の増減の違いがみられることも示された。

なお、一部の学級については、能動的・受動的加担がそれぞれ変化した得点を用いた散布図を作成することで、各クラスの特徴を図示した結果のフィードバックを実施した。

(3) いじめ目撃時の感情と被勧誘時の態度

「制裁」を理由とするいじめを目撃した際に経験される感情（シャードンフロイデと同情）と、過去に調査対象者が実際にいじめに加担した経験に関する質問紙調査を実施した。小中学生 1368 名を対象として、制裁的な理由によるいじめ加害場面をいくつか呈示した後に、その後日談として当該の架空の人物がいじめられる場面を目撃した場面を呈示し、その時に経験されるシャードンフロイデと同情を測定した。その質問紙と調査時に、過去にいじめに関わった経験の有無を問う項目への回答も求めた。

こうして得られた感情と経験の得点を用いた解析の結果、小中学生は図 3 の通りに分類された。すなわち、いじめ目撃時に喜びながら、加担経験が少ない「享乐的傍観者」、いじめを喜び、加担経験が多い「享乐的観衆」、いじめ被害者に同情的で、加担経験が少ない「同情的傍観者」、いじめ目撃時には喜ばず同情もしないが、加担経験が多い「非同情的観衆」の 4 群（CL：クラスター）である。同情的傍観者は全体の約半数を占め、享乐的観衆と非同情的傍観者は中学生に多かった。



注) () 内は各群の人数を示す。

図 3 いじめ目撃者の感情に基づく分類 (沢田, 2011)

さらに、いじめ目撃時の感情だけではなく、いじめに参加するように誘われた際の態度と、いじめ被害者に対する感情（妬みと恨み）がその態度に及ぼす影響に着目した調査を実施した。小中学生 1707 名を対象とした質問紙調査では、友人たちから、ある特定の人物に対して、制裁的ないじめに参加するよう勧誘される場面が呈示された。その際、当該のいじめ被害者となる人物に、ネガティブな感情（妬み・恨み・統制）を経験させるようにあらかじめ操作されていた。

以上の手続きを経てから、いじめ被勧誘時の態度について、3 つの観点（賛成・表明・参加）から評定を求めた。これらの回答に基づいて小中学生の類型化を試みたところ、「傍観者」「(加害者の) 支援者」「強化者」「追従的支援者」「擁護的傍観者」の 5 群に分けられた。

続いて、いじめ被害者に対する感情の違いによる各群の人数比の違いがあるかを検討したところ、いじめ被害者に対してあらかじめ恨みを抱いていた場合、いじめ加害を支援したり強化したりする者が多くなるのに対し、被害者を妬んでいた場合には傍観者になりやすかった。このように、いじめの被害に先行する感情の違いによって、いじめへの関与の度合いが異なることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Sawada, M., & Hayama, D., Dispositional vengeance and anger on schadenfreude, Psychological Reports, 査読有, 111, 2012, 322-334.

[学会発表] (計 4 件)

- ① 沢田匡人、いじめを哀れむ児童・いじめに興じる生徒—シャードンフロイデと同情から見たいじめ目撃者の類型化の試み—、日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会、2011 年 9 月 2 日、京都光華女子大学
- ② 沢田匡人、他人の不幸はなぜうれしいのか?、日本心理学会第 76 回大会、2012 年 9 月 12 日、専修大学
- ③ 沢田匡人、いじめ被害者に対する妬みと恨みが参加役割に及ぼす影響—いじめ被勧誘者の態度に基づく類型化を通じて—、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 18 日、法政大学
- ④ 藤井 勉・沢田匡人・井上裕珠・平間章子、自尊心がシャードンフロイデの喚起に及ぼす効果—潜在連合テストを用いて—、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 18 日、法政大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢田 匡人 (SAWADA MASATO)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：40383450